

公園文化の集い

in 昭和記念公園



一般財団法人 公園財団

Parks and Recreation Foundation

テーマ | ボタニカルアートの世界



開会挨拶

(一財) 公園財団 理事長

荻茂 壽太郎



基調講演

P. 03 万葉集に詠まれた植物と植物画

東京大学名誉教授

東京大学総合研究博物館特招研究員

大場 秀章 氏

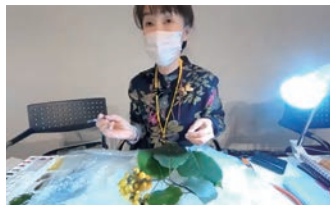
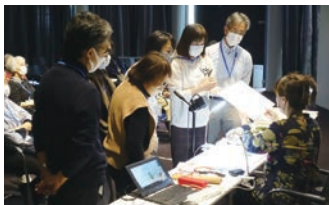
植物画 デモンスト レーション

英国キュー王立植物園公認植物画家

山中 麻須美 氏

※発表者の肩書、基調講演の発表内容は発表当時のものです。
また、本冊子には、基調講演のみを収録しています。

〈植物画デモンストレーションの様子〉



(一財) 公園財団では、公園や緑地の価値向上のため、公園での様々な活動を市民へ発信することを目的に「公園文化の集い」を開催いたしました。

今年度は、国営昭和記念公園で開催された全国巡回展「万葉植物画展～アートと万葉歌の出会い～」に合わせ、「ボタニカルアートの世界」をテーマに実施しました。講演とデモンストレーション(実技)をすることで、ボタニカルアートについて知見だけでなく、技術や手法についても学べる機会としました。



【日 時】令和4年10月29日(土)
11:10～16:00

【会 場】国営昭和記念公園(東京都立川市緑町)

【主催等】主催 (一財) 公園財団
共催 国営昭和記念公園、日本植物画倶楽部
後援 (一社) 公園管理運営士会

【参加者】137名
(会場参加: 37名、オンライン参加: 100名)

万葉集に詠まれた 植物と植物画

東京大学名誉教授
東京大学総合研究博物館特招研究員
大場 秀章 氏



万葉集に詠まれた 植物と植物画



大場秀章



◆万葉集とは

万葉集は、奈良時代末期の759年から780年ごろに成立したと推定されており、現存する日本最古の和歌全集です。編纂には様々な人々が関わっていると思われ、最終責任者は、歌人の大伴家持（おおもものやかもち）であった説が有力と考えられています（諸説あり）。私たちが万葉集と呼んでいるものは、鎌倉時代後期に作られたとされる「西本願寺本万葉集」を指しており、全20巻からなる完本です。

私たちが和歌を作る時は、平仮名が主体の漢字が入り混じったものですが、万葉集の和歌は、全て漢字で書かれています。また万葉集に収載された和歌の作者は、天皇や貴族、官人、防人（さきもり）、農民等、その身分は様々で、4516首もの和歌が収載されています。

万葉集の和歌について研究されていた若浜汐子氏によると、約1600首が植物に関連する和歌で、1965年発行の『万葉植物原色図譜』にてまとめています。植物が和歌に登場するパターンは主に3つに大別できます。1つ目は、植物名が読み込まれた歌、2つ目は、植物名は示さないが、木や草、花等と表現した歌、3つ目は、上記のどちらも示さず、状態を詠むことで草木であると判る歌です。その他に紛らわしい歌として「春すぎて 夏来たるらし 白妙の 衣干したり 天の香具山」のように、山の緑を背景としている歌は対象外としています。人の心情や景色等を表現する和歌もある中で、植物に関する和歌は万葉集全体の約35%と多く、この時代の歌人に影響を与えていたと考えています。

◆万葉集に収載された植物ランキング1位「萩」

2010年に木下武司氏が万葉集に詠まれた植物の多い順番をまとめており、その順は、ハギが最も多く、次いでウメ、マツ、タチバナ、アシ、スゲ、サクラ、ヤナギ、ススキ、フジ、ナデシコ、チガヤ、コモ(マコモ)、ウノハナ(ウツギ)、クスでした。これらの植物は決して珍しい植物ではなく、身の回りの植物を観察して、歌に詠んでいたということなのです。

ハギの仲間には日本に8種あり、関東地方から北側に分布しているのがヤマハギです。秋頃に小さな花が小枝の先に群がって咲き人目を引く植物です。今回の「アートと万葉歌の出逢い」の基になった万葉植物にヤマハギの絵が出ています。ハギを詠んだ歌は141首もあり、多くの人がハギに関心を持っていたことが分かります。ハギの仲間で普段目にしやすいのは、花の色が少し淡いツクシハギと西日本で広く見られる花の大きいビッチユウヤマハギで、これらは容姿がよく似ており、万葉の時代、全てを総称してハギと呼んでいました。ハギの仲間は花の上部に旗弁と呼ぶ花弁をもっており、ツクシハギは上部の旗弁の基部に内側に大きく曲がる付属物があり、ビッチユウヤマハギは、花の大きさがヤマハギより一回り大きく萼筒が細長い等、一目瞭然の違いますが、この時代は一緒にたにハギと見ていたそうです。

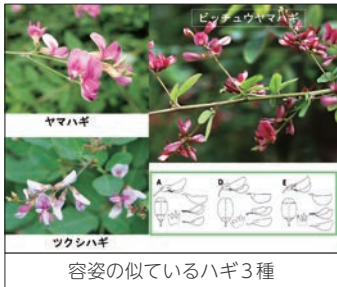


ハギが多くの歌に詠まれた理由は、花の観賞価値だけではなく、秋の季節の訪れや道端に咲くハギを見て、ふと歌にした和歌もあると思います。他にもハギの用途から探ってみると、ハギの枝は先端にかけて細かく分かれ草質(くさだち)を形成します。東北地方の農家では、秋になるとこの草質を堆肥の材料にするそうです。

花がきれいなだけでなく、農民の生活に大いに役に立つ植物だったので、ハギを詠んだ歌が多いのではないかと思います。

◆早春の代表「梅」

次いで多く詠まれたウメは、元々日本にはなく中国から渡来した植物です。当時、様々な品種が中国から日本に渡来して栽培されていましたが、その中でもウメは、広く全国的に栽培がされ、多種多様な栽培品種が作られました。日本でも中国とほぼ同様にウメの花を観賞するだけではなく、薬用あるいは食用として利用していたことから、国民からの関心も高く、広く周知されていたことが分かります。



◆年始を告げる「松」

3番目に多く歌われた植物はマツです。マツの中でもワロマツは、関東地方から西の海岸と日本海側に見られ、アカマツは九州、四国、本州の海岸付近から標高1400mの丘陵や山地に自生しており日本全国で植樹されている代表的な樹木です。また日当たりのいい草原を松林に変え、百数十年経った後マツは枯れて次の樹木が群生する、植生の遷移の先駆樹種です。

当時の日本は、基本的に草原に生える植物は極めて少ない土地柄でしたが、アカマツが繁茂していたのは、前提として草原があったということでした。これは、昔から全国的に、日本人が生活のために森林を伐採し、煮炊きや精錬等の燃料にしたり、材木を集め、牛や馬を飼う草原に利用していたことを暗示しています。つまり、アカマツが何処でも群生でき、私たちの身近な存在として歌に詠まれていたと推定できます。



◆「ミカンの基」橘」

タチバナの名前は聞いたことがあっても、どんな植物かあまり周知されていないのではないのでしょうか。現在の野生のタチバナの分布は、紀伊半島や四国の海岸地帯だけで、当時、中部地方から西の地域に個体数は少ないが広く分布していた樹木です。

タチバナの容姿は、ミカンやベニコウジ、スタチ等に似ています。江戸時代にタチバナの突然変異の株を選抜して商品化したものがそれらの栽培品種なので、当時のミカンとはタチバナのことだと思われまます。秋には、黄色い目立つ果実を結び、食べられることも相まって、人々の関心を引き、多くの歌に詠まれていたと考えられます。



◆現代の春の風物詩「桜」

ヤマザクラの仲間のカスミザクラやオオヤマザクラなどを含むサクラは、全部で36首あり、タチバナに次ぐ首数です。サクラよりもタチバナの方が多いいのは、食べることの方が当時の人々にとっては意味が大きかったと予想しています。現代の様に花と言えばサクラというような認識が万葉の時代にはまだなかったことが想像できます。



◆桜と同数詠まれていた植物「しだれ柳」

シダレヤナギを詠んだ歌はサクラと同数ありますが、ヤナギではなくわざわざシダレヤナ

ギという形で万葉集に詠まれています。一つの見解では、ヤナギのしなる枝が例えば、薪を束ねる生活のための用具や工芸的な意味で利用する身近な植物であったのではないかと考えていますが、明確な答えは分かりません。

◆お月見に欠かせない「薄」

ススキは、一般的には茅かやと呼びます。西日本では、林を伐採した後ススキの草原になることが多く、身近な植物でした。ススキの花は、長さ3ミリ程と小さく、花を愛でるといっても、お月見の時にススキの穂を捧げる等の意味で観賞性を見出していた可能性があります。

なぜススキを詠んだ歌が多いのか、何か別の要因があるような気がしています。

お月見でススキを添える風習の起源は、はつきりしていません。万葉集には様々な植物が登場しますが、登場した理由を考えていく際に、当時の人々がどんな目的で、何のために利用したのか等、その時代の生活をよく知ることが重要だと思えます。

今までの万葉植物の研究では、そういう視点が疎かにされていた気がします。植物学者だけでなく、多分野の人と連携して一つ一つ解決しなければならぬ問題であると思います。



ススキ



シダレヤナギ
(植田 修二画)

◆日本の植生について

日本は植物の成長に必要な水は何処にでもあるので、植物から見たら非常に恵まれた国です。しかし南北で温度差があるため、西日本では、1年中葉っぱが落ちず、上から見ると丸い形の樹幹で、光が当たると照り返す常緑広葉樹林(照葉樹林)の地域が多いです。中部地方の標高の高い地域や東北地方では、秋になると紅葉し冬期に落葉する落葉広葉樹林ができます。北海道はさらに違うタイプの森林ができる等、地域により主体となる森林が違います。主体となる森林が違えば、林床植物も当然違い、例えば四国と東北地方では、共通する植物は非常に少なく、西日本と東日本の植物は別の顔をしています。また、当時常緑広葉樹林を人間の生活に合わせて森林を伐採し、水田や畑を耕していました。これらは放置すると落葉樹が混じる等、元々の植生とは違う二次林ができ、人の手が加わった林を「里山」と呼びます。西日本の場合、特別天然記念物に指定された地域にしか照葉樹林はなく、ほとんどが里山の景観です。

一方、落葉樹のブナ林の伐採後に遷移し二次林になった時の特有な現象として、大規模な二次的な草原ができます。この二次的な草原には、元のブナ林とは異なる植物が新たな森林のタイプに応じて繁茂します。このように日本は、世界的にみても多くの野生植物が見られる非常に恵まれた環境であり、日本の植物画を見ると、どのタイプの森林の樹木なのか、それが二次林の植物なのか等、多様に描かれていて興味深いです。

◆ 当時は蔓を利用「藤」

次の植物はフジで、26首が万葉集に詠まれています。フジと聞くと私たちは、もっぱらフジの花を思い浮かべますが、当時、フジの長く伸びた蔓状の枝を割いて、硬質で頑丈な紐として使われていたことから、人々の役に立つ身近な植物として知られています。



◆ 純粹に愛でられた花「撫子」

ナデシコは2首あり、薬用や食用等の用途がない生活に役立たない植物です。つまり、花を愛でて、歌にした本当の意味で観賞目的の植物であると思います。

今でもナデシコが好きという方に、なぜ好きか聞くと、「純正な花」や「清楚」、「日本人の特徴等と表現をされる方がいます。これらが理由か、私は正しいか分かりませんが、万葉集に詠まれた鑑賞目的の植物では一番多いことは確かです。



◆ 卯月の由来の花「空木(卯花)」

次がウツギで、これも複数種あり、どれも外見が似ています。万葉集ではウノハナと呼び、地方では未だにウノハナという名前で知られています。ウツギの枝の真ん中には髄があり、古い枝の髄は固まると中が空になることから、空の木と書きます。ウツギの用途で考えられるのは、空になる前の枝の髄の部分だけを取り出して、明かりの灯芯にすることです。当時の農家では、庭の一部に枝の髄が発達するヤマブキを植え、観賞目的かつ、灯芯を生活に利用するために使っていました。ウツギもその可能性がありますが、はつきりとウツギを灯芯に使っていたかはまだ分かりません。



◆ 万葉の時代の生活用品「葛」

クズという植物の名を聞いた時、外側を覆う見苦しい植物を思い浮かべる方も多いと思いますが、手入れをせず放置するとあの状態になるだけで、万葉の時代のクズは違います。

当時、クズの蔓を紐の代わりに利用していたことと地中に作る大きな地下茎を食べていたことです。また、秋には色鮮やかな花を穂状に付ける特徴も、注目を集めた理由だと思っています。



◆聖書と万葉集の植物

民族植物学に大きな貢献を与えた大阪府立大学の中尾佐助先生が、1986年に出版した「花と木の文化史」にて、聖書と万葉集に出てくる植物についてまとめていました。

聖書に登場する植物の大半はブドウで次がコムギ、イチジク、アマ、オリーブ、ナツメヤシ、ザクロ、オオムギで、食べ物や材木、香料等、人間の生活に密接な植物がたくさん登場していることが分かります。これは聖書の性質からして、観賞価値のある植物よりも、聖書ができた当時の人々が感心を持つ衣食住に関連する植物が多いということなのです。例えばブドウは、193個と圧倒的に多く、当時、お酒を飲みたいけど飲めない人が多いことを意味している可能性が考えられます。

万葉集では、冒頭で挙げた種と少し違いますが、順番はハギ、ウメ、マツ、モ(藻)、タチバナ、スゲとなってます。藻を除くと、食用や材木用だけでなく、花に観賞価値のある植物が多く含まれていることが大きな特徴です。つまり、日本人は古くから植物の資源性だけでなく、花の観賞性が高い関心を抱いていたことが言えるのではないのでしょうか。

聖書		万葉集	
ブドウ	193	ハギ	138
コムギ	60	ウメ	118
イチジク	52	マツ	81
アマ	47	モ(藻)	74
オリーブ	40	タチバナ	66
ナツメヤシ	27	スゲ	44
ザクロ	26	スキ	43
オオムギ	26	クラ	42
テレピンノキ	19	ヤナギ	39
イチジクグワ	8	アズ	33

聖書と万葉集に登場する植物の多い順
(中尾 佐助,1986年)

◆染物文化「紅(紅花)」

万葉集には、クレナイ(ベニバナ)という名前が35首も登場します。クレナイの花は、元々の黄色からだんだん赤色に代わる植物で、水溶性の黄色色素のサフロールイエローがフェノール性の赤色素のカルタミンに移行していくことで変化します。これらの色素は西洋でも、中国でも、日本でも、繊維等を染める際に昔から重宝されてきました。

綿や麻等の植物性の繊維は、フェノール性のカルタミン(赤)でのみ染色でき、ベニバナを使えばどの段階の花でも赤く染まります。ところが動物性の繊維の絹は、サフロールイエロー(黄)にも染まるため、黄色と赤色が混ざった橙色の染め物になってしまいます。ベニバナを使って絹を美しく赤く染めるためには、黄色色素が発色しない状態にしないと染まりません。日本では媒染剤を使って黄色色素の発色を抑えています。その方法は、わら灰を混ぜ黄色色素の発色を抑えた後、媒染効果を安定させるために梅酢で中和して赤色を固定する染め方をしていました。これは平安時代の中頃から日本で定着した紅染めという方法で、着物を染める際に重宝されてきました。また、ベニバナを描く時は、時間的な推移、つまり若い花がだんだん黄色から紅色に変化する様相も表現すると、優れた作品だと思います。今日私たちは「ベニバナと呼びますが、万葉集では「クレナイ」といつ名前が35首もありました。「紅(紅花)」という名前が26首、



クレナイ(ベニバナ)
(尾形 幸子画)

「冥藍くれなゐ」が1首、「久禮奈くわいな」が8首です。しかし「紅の深染めの衣を下に着は人の見らくにほい出でむかも」では、紅色(赤)を表現している等、ベニバナ自体を詠んだ歌は、実は3首しかなく、他は紅色を詠んだ歌でした。

万葉集にどんな植物が詠まれていたか調べる際に、名前だけで「あ、これは植物だ」とカウントするのは大きな間違えで、判断に迷う歌等一つ一つ検討しないと正確な数は出せません。これはベニバナだけでなく、特に資源利用する植物は、万葉集の歌を理解する際に、植物自体を詠んだ歌か、その資源性を詠んだ歌なのか、十分に注意することが重要だと思えます。

◆毒性を持つ白い花「馬酔木」

アセビは、白い花を付ける植物で、万葉の時代は、広範囲に分布していましたが、知名度はいまひとつでした。資源としての利用価値があまりなかったものの、万葉集で10首もアセビを詠んだ歌があるということは、この植物の美しさや観賞価値を万葉の時代の人々はよく知っていたことなのでしょう。



◆ニワトリのトサカ「鶏頭」

ケイトウは、中国から渡来した植物で、枝の先端が花のような形をしています。植物学的には花ではありません。ケイトウの仲間には、花は薬草として利用されますが、特別な用途もなく、その特異的な形に対して観賞価値を見出され、4首の歌が詠まれたものと想像しています。



◆夜に眠る植物「合歓木」

ネムノキは、3首が万葉集で歌われており、「ネム」や「ノウカン」という名前で使われています。ネムノキの葉は、細かく分裂しており、昼間は開き、夜は閉じて眠っているような様から、ネムノキという名前が付けられたと言われています。ネムノキも特別の用途はなく、単に葉の開閉運動の珍しいことや梅雨の季節に咲く花として注目を集めたと考えられます。葉が眠るという極めて知的な理解を植物に対して感じていたことが面白いと思う植物です。



◆草とも木とも違う「竹」

タケの仲間、土壌層が厚い場所に接して生え、地下茎は柔らかい土壌に伸びて群生し、竹藪を作ります。知名度は高いのに詠まれた歌が少ない理由を想像してみました。

マダケは、タケノコのこと、モウソウチク等と比べると細く、食用価値はあまりありませんでした。関東圏では、物干し竿や竹ひご、提灯の骨等の用途に使いますが、当時はそれらに関心がなかったのではないかと考えています。



◆紅葉狩りと言えば「楓」

カエデは、カエルの手をした葉の形からカエ(ル)デという名前が詠まれています。カエデの仲間は、日本に16く17の種もあり、葉の形が似ているモミジもその一つです。万葉集では、黄色に変わるカエルデをにわりのみぢ鶏冠木と漢字で表現していました。

万葉の時代、葉が紅く変わることも、黄色に変わることに對して高い関心がもたれていました。紅く変わる紅葉が着目されるようになったきっかけは何か。それはお



そらく、紅葉狩りです。紅葉狩りを表現する和歌は、鎌倉時代から始めたため、万葉の時代にはない性向だったと考えられます。

◆本物の柏はどれ「柏」

カシワは、「柏」と書くのが一般的ですが、万葉集では歌によって漢字の表現が様々です。また、「柏」も実際には、コノテガシワという針葉樹で、「安可良我之婆」もカシワではありません。他にも「保たかひ」に「實み」と書いて「保實我之婆」と読むが、これはホオノキを指し、「古ふる」に「乃の」、てにはの「て」と書いて「古乃この加か之波は」と読みます。カシワの歌では、針葉樹の「コノテガシワ」を指す歌が多く、一部ホオノキの歌が含まれています。

万葉集の植物は、厳密な考証をした、その過程が明らかにされていないと、理解できない部分が多く、万葉植物の同定というのは、苦労が要ります。



◆謎の多い万葉植物「枳殼」

カラタチは、万葉の時代に中国から渡来した植物ですが、渡来した証拠が万葉集だけという不思議な植物です。つまり本物のカラタチを万葉集に詠んだかは、はっきりしていません。そもそ

もカラタチを詠んだ歌も1首しかなく、その歌もノイバラの棘の鋭さを強調するためにカラタチの名前を出しているだけでした。

文献の知識からカラタチの棘が鋭いと知っていた人が、ノイバラを形容するためにカラタチを使って歌にした可能性が考えられるので、万葉の時代にカラタチが本当に日本に渡来したかどうか、検証しないと何とも言えない植物だと思えます。



カラタチ
(クリスタベルキング画)

◆勘違いから縁起の悪い木に「梅檀(棟)」

センダンには、万葉集で「棟(あふち)」という名前が詠まれており、センダンという名前は一つも出てきません。また、面白いことに4首の棟の文字は、全部違い歌の内容からセンダンだと判断しているものの、確証はまだありません。

万葉の時代、棟は中部地方から西に広く分布し、庭等に植えられていましたが、平家物語や源平盛衰記にて、獄門の罪人の首を掲げる木という印象に変わりました。その「棟」の字を異なる字で誰かが間違って書き、その間違った字を棟だと誤って解釈をして、縁起の悪い木として認識さ



アフチ (センダン)
(竹尾 絹枝画)

れたという歴史があります。

◆万葉集と植物のまとめ

現代の私たちが知る植物と同名の植物が万葉集で詠まれていても、本当に同じ植物かは深く追求しないと、安直に「そつだ」と言っただけはいけません。古典を読む時には、時代の背景や作品が生まれた場所、作者や登場人物たちがどついつう人なのかまで含めて、理解することが欠かせないと強く思います。そういう意味で万葉集は、まだ分からないことがたくさんあり、未だ研究の余地や面白い発見があるところだと思います。

万葉集に興味をお持ちになりましたら、ぜひ研究を深めていただきたいと思います。

※掲載植物画は日本植物画倶楽部会員の制作によるものです

【質疑応答】

【Q①】ハギの先端を肥料にするとお話を伺ったが、これはマメ科の植物の窒素固定を利用して、シソと同じように畑にすき込んだと理解してよろしいですか

【A①】 そうとも考えられますが、枝が細く細かいため、腐敗しやすく容易に土と一体化することを重視したのではと思います。当時、窒素固定への理解はまだないのではと思います。

【Q②】 古来より、日本の花と言えばウメと理解されていたと思いますが、平安時代からサクラが日本の花だと広まったと聞いたことがあります。この変化の背景にはどんなことが考えられるのでしょうか。

【A②】 私自身、ウメからサクラに変わったと理解していません。ウメに対する理解は、サクラより古く、新たにサクラへの理解が加わったと考えるといいと思います。サクラは平地より山に分布しているのも、人間の活動領域が広がらないとなかなか認識できない植物です。ウメは中国から渡来し、宮中や屋敷に植えられ、貴族等の立場の人たちはその植物を愛でる方が容易で、山のサクラの存在には気が付かなかったんだと思います。

逆に地方の人や農民は、古くからサクラを知っていて、特に西日本では、「サクラの開花は農耕の始まりの合図」「サクラ」という言葉自体が農耕の始まり」という様な風潮があります。他にもサクラの花の咲く季節になると、魚も体色が紅色や桜色に変わる等、農耕の開始のシグナルであり、ウメは知らずともサクラは理解していたと思います。一緒にたにウメからサクラに理解が変わったと考えなくてもいいと思います。

【Q③】 平安京の庭には最初、ウメが植えられていたが、ある時期からサクラに変わったと文献で読んだことがあります。貴族階級でもサクラの方が価値があると見なされたのですか。

【A③】 詳しく研究したことはありませんが、嵯峨天皇がサクラを特に愛されていて、植えるようにご言託をしたと言われています。それに伴い都の人たちの活動範囲が広がり、地方のサクラがある地域に荘園を造られ、サクラを愛する人たちが都にも徐々に増えていき、宮中でもサクラの認識に変化が起きた可能性はあると思います。

【Q④】 万葉集を読む時にいつも戸惑うのが、綿と絹です。大陸や半島から生物学的な導入と人為的な導入を勘案すると、当時の絹を現代の綿として読み解いてよいのでしょうか。そして、当時の綿は現代の綿と違い、とても貴重だったと読み解いてよいのでしょうか。

【A④】 前者に関しては、私はよく分かりません。後者に関しては、綿は日本に伝わる以前から、原産地で広く栽培されていたので、日本に渡来してくる過程や背景を知らずに、綿に希少性を見出していたのではないかと思います。

絹に関して、質問の意味とはずれるかもしれませんが、絹は蚕からとる繊維ですが、蚕以外の野生の昆虫からとった絹もあったので、今以上にいろんな種類の絹があったことを理解する必要があると思います。

